

同性への誘惑

神はわたしたちを男と女に創造されました。わたしたちが性と呼ぶものは、この世に生を受ける前のわたしたちを特徴づけるのに欠くことのできないものでした。

十二使徒定員会会員
ダリン・H・オークス

未日聖徒であればだれでも、結婚というきずなを超えたいかなる性的な関係をも神が禁じられたことを知っています。また多くの人は、男が女を見て情欲を抱くのは罪であるという救い主の教えを承知しています(マタイ5:28; 教義と聖約42:23; 63:16参照)。

男女間の互いを引きつける力は、創造主によって植え付けられたものです。その目的は肉体の誕生の永続化であり、子育てをはじめ、主がその目的を果たすために定められた家族という舞台に夫と妻を引き寄せることです。これとは対照的に、この生殖の力の使用に関する神の戒めからの逸脱は、重大な罪です。ジョセフ・F・スミス大管長はこう教えています。

「性の結合は結婚生活において合法であり、正しい意図をもって行なうならば誉れあり聖とされる行為である。しかし結婚の契りがなければ、性的^{たんでき}耽溺は卑しむべき罪であって、神の目には憎むべきものである。」¹

さて、末日聖徒の中には同性との性行為、もしくはそうした行為に至る可能性を秘めた同性への性愛的な感情のために混乱と心痛を覚えている人がいます。この行為や感情がもたらす宗教的、情緒的問題、そして家族へのチャレンジに対して、教会の指導者や親、そして一般の教会員はどのように対処したらよいのでしょうか。同性に引かれるものがあるとか、性愛的な感情を覚えるなどと若い人たちから言われたとき、わたしたちは何と言っ

男女間の互いを引きつける力は、創造主によって植え付けられたものです。その目的は肉体の誕生の永続化であり、子育てをはじめ主がその目的を果たすために定められた家族という舞台に夫と妻を引き寄せることです。



ADAM AND EVE KNEELING AT AN ALTAR, BY DEL PARSON

0494-811-0417

20冊を収録。輸入品



ダリン・H・
オークス長老

てあげたらいいのでしょうか。自分はホモセクシュアル
またはレズビアンであって、「生まれつきそうであるこ
とは科学が証明している」と言う人に対して、わたした
ちはどう答えるべきでしょうか。わたしたちは、同性へ
の性愛的な感情は正当ではなく、この種の性行為はすべ
て罪であると主張していますが、それに対して教会員で
ない人々から、それは不寛容であり無慈悲であるとの非
難を受けたとき、どう対応したらよいのでしょうか。

福音の教え

こうした疑問に対してどのような態度をとるべきかは、
わたしたちが真実であると信じる福音の教えの中に次の
ように述べられています。

1. 神はわたしたちを「男と女」(教義と聖約20：
18；モーセ2：27；創世1：27)に創造された。わたした
ちが性と呼ぶものは、この世に生を受ける前のわたした
ちを特徴づけるのに欠くことのできないものであった。²

2. この世の人生の目的であり、末日聖徒イエス・キ
リスト教会の目的を成すのは、神の息子、娘をその行く
末のために備えさせること、すなわち天の御父と似た者
となるように備えをさせることである。

3. わたしたちの永遠の行く末は日の栄えの王国での
昇栄であるが、それはイエス・キリストの贖罪を通じて
のみ可能になる。(わたしたちは贖罪を通してのみ「神
の前に罪のない者」〔教義と聖約93：38〕となり、その
状態を保持することができる。)そして、実際に昇栄に
あずかれるのは、神の宮である神殿で永遠の結婚の聖約
を交わし、しかもその聖約に忠実であった人だけである
(教義と聖約131：1-4；132章参照)。

4. 天の御父の慈悲深い計画により、正しいことをし
ようという望みがあったにもかかわらず自らの過ち以外
の理由でこの世で永遠の結婚ができなかった人は、神の

戒めを守り、バプテスマやそのほかの聖約に忠実であれ
ば、後の世で永遠の命を得る資格を授けられる。³

5. 贖罪という清めの力に加えて、神はわたしたちに
選択の自由を授けてくださった。善(命の道)と悪(靈
の死と破滅の道〔2ニーファイ2：27；モーセ4：3参
照〕)を選ぶ力である。もちろんこの世での諸条件によ
りわたしたちの自由には制限が加えられるが(例えば、
ある選択をしてもそのとおりに動けないとか、それを実
行する力がないなど)、一度責任能力のある年齢もしく
は状態に達すれば(モロナイ8：5-12；教義と聖約
68：27；101：78参照)、いかなる物理的、霊的力もわた
したちから選択の自由を奪うことはできない。

6. この世での生活の目的の一つを果たすために、わ
たしたちは反対のものによる試しを受け、神の戒めを守
るか否かの確認を受けなければならない(2ニーファイ
2：11；アブラハム3：25-26参照)。その反対のもの
を提供するために、サタンとサタンに従う者たちはわた
したちを誘惑することを許された。選択の自由を用いて
悪を選び、罪を犯すように誘惑するのである。

7. サタンは「人が自分のように惨めになることを求
めている」(2ニーファイ2：27)ので、神の子のため
の計画を妨害する選択や行動へと人々を執拗に誘惑する。
そして、個人が自らの行動に責任を持たなければならない
という原則をゆがめ、生殖という神聖な力を乱用する
ように誘惑し、ふさわしい男女が結婚し子供をもうける
ことを思いとどまらせ、男性であり女性であることの意
味を混乱させようと躍起になっている。

8. これらすべてのことにおいて、肉体を持たない悪
魔は、この世の人間が「肉の思い……に従って、永遠の
死を選」ぶことによって自分たちの肉体を墮落させるよ
うに説得しようとしている。「肉の思いは、悪魔の靈に
力を与え、〔人々〕を捕らえて地獄に落とし、悪魔は彼
自身の王国で〔それらの人々〕を支配する。」(2ニー



ILLUSTRATED BY DEL PARSON

わたしたちは健康を害している人々に対して思いやりを示さなければなりません、それにはHIVに感染している人やエイズにかかっている人も含めてしかるべきです。(エイズの場合、性交渉によって感染したとは限りません。)わたしたちはこうした人々に対して、教会の活動に参加するよう奨励すべきです。

ファイ 2 : 29)

9. 大管長会は次のように宣言している。「(1) 不道徳な思いや感情を抱くことと (2) 異性や同性と不道徳な関係を結ぶこととの間には、はっきりとした違いがあります。」⁴ もちろん、不道徳な思いは不道徳な行為に比較して重大さの程度は軽いですが、そうした思いも抑制し悔い改めるようにしなければならない。「わたしたちの思いもわたしたちを罪に定める」(アルマ 12 : 14) からである。不道徳な思い (ならびに重大ではないものの、そうした思いのきっかけとなる感情) は、罪深い行為をもたらす可能性があるからである。

10. 神の子であるわたしたちへの神の愛は偉大であるので、最もひどい罪人といえども (言い換えれば、罪を犯した大多数の人は)、最後には栄光の王国の一つを受け継ぐという報いを受ける。⁵ この世で善良な生き方をし、救いの儀式をほとんど受けながら、永遠の結婚を通してもたらされる昇栄へのふさわしさに欠けていた人は、日の栄えの王国の低い階級に救われるであろう。そこに

は、永遠の増加はない (教義と聖約 131 : 1—4 参照)。

11. 問題や選びの連続であるこの世の人生にあって、すべての人は救い主の「互に愛し合いなさい」(ヨハネ 15 : 12, 17) との戒めの下にある。大管長は最近のメッセージの中でこう述べている。

「わたしたちは互いにもっと親切であるように、もっと優しく、もっと人を赦すように求められています。また、怒るにもっと遅く、助けるにもっと速くあるように言われています。さらに、友情の手を差し伸べ、報復の手を抑えるように求められています。そしてキリストの真の弟子となり、心からの思いやりをもって互いに愛し合うように言われています。それがキリストがわたしたちを愛される方法だからです。」⁶

親切と思いやりと愛は、自分には何の過ちもないにもかかわらず負わされている重荷に耐えられるように、また、自分で正しいと思うことを行えるように、わたしたちを強めてくれるものである。

福音の教えとわたしたちに課せられた義務の応用

こうした教えと戒めと義務は、本稿の初めに提起された質問への答えとしてわたしたちを導いてくれるものです。

わたしたちの教えが、いわゆる「ゲイ・パッシング」(ホモセクシュアルまたはレズビアン^{レズビアン}の行為にかかわっている人々を物理的に、また言葉で攻撃すること)にかかわる人々を非難していることは明らかです。

わたしたちは健康を害している人々に対して思いやりを示さなければなりません、それにはHIV(ヒト免疫不全ウイルス)に感染している人やエイズにかかっている人も含めてしかるべきです。(エイズの場合、性交渉によって感染したとは限りません。)わたしたちはこうした人々に対しても、教会の活動に参加するよう奨励すべきです。

同性による性関係の問題に大管長会の見解を応用してみましょう。まず、(1)ホモセクシュアル(レズビアン)の「思いや感情」(これは抑制し、気持ちを切り換える必要があります)と(2)ホモセクシュアルの「行為」(これは重大な罪です)に分けなければなりません。

ここで注意しなければならないのは、「ホモセクシュアル」や「レズビアン」「ゲイ」という言葉は、ある特定の思いや感情、行動を表す形容詞であることです。したがって、こうした言葉のある特定の状況や具体的な人物を指す名詞として用いることはやめなければなりません。わたしたちの教会には、こうした言葉の使い方を規定する教えがあります。こうした言葉を、「状況」を示す言葉として使うのは誤りです。なぜならそれは、性に関する「行動」というきわめて重要な事柄について、その人が生まれながらにして選択の余地のないある状況に拘束されていることを暗示することになるからです。

もう一つは感情です。中には生まれつき備わっている感情もありますが、ほかはわたしたちのこの世での経験に起因するものです。また、「生まれつきのものとこの世で養われたもの」とが複雑に絡み合って生じることもあります。わたしたちには皆、自分で選んだのではない感情が存在します。しかし、イエス・キリストの福音は、

わたしたちには感情に抵抗し、(必要に応じて)それを變形させていく力があると教えています。感情がわたしたちを導いて、不適切な思いを抱かせたり罪深い行動を取らせたりしないためです。

人によって体の特徴は異なります。そして、子供のころまた大人になってから遭遇する様々な肉体的、情緒的圧力に対する感受性も人それぞれです。感受性もわたしたち自身が選んだものではありません。しかし、その感受性のうえにわたしたちが植え付けた態度や優先順位、行動、そして「生活様式」はわたしたち自身が選んだものであり、自ら責任を取るべきものです。

こうした事柄へのわたしたちの教義的立場を考えるうえで欠かすことができないのは、単なる自由と選択の自由の違いです。わたしたちの自由はこの世の様々な条件によって制限を受けますが、神の賜物である選択の自由は、外的な力の影響を受けません。それは、選択の自由が人の責任能力の根幹を成しているからです。この単なる自由と選択の自由の違いは、感情から思い、思いから行動、行動から習慣という進行の過程を想定するとよく見えてきます。この進行の過程は、ギャンブルやたばこ、アルコールなど、いろいろなものの中に現れてきます。

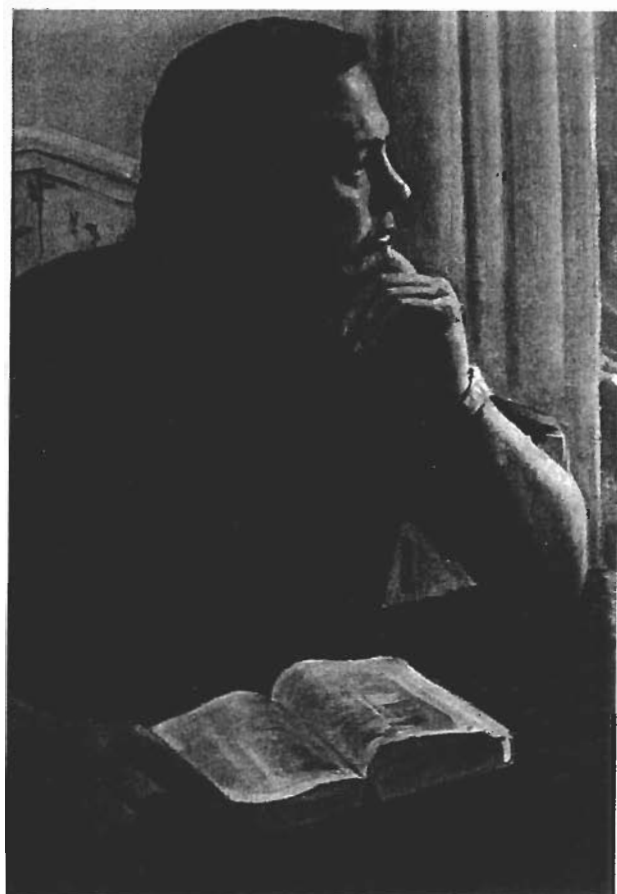
さて、普通の人とは異なった感情を抱く人々がいるように、ある特定の行動や反応、習慣に対して異常な感受性を示す人々があります。恐らくそうした感受性は生まれつきのものであるか、もしくは個人の選択や過ちによらずに獲得したものでしょう。使徒パウロが次のように呼んだ名前の分からない病気と似ています。「わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンつかいの使なのである。」(2コリント12:7)ある人にギャンブルに引きつけられる感情があるとします。普通の人ならちょっと楽しむ程度で止まるのに、その人は何かに取りつかれたようにギャンブルにのめり込んでしまいます。ある人はたばこに魅力を感じ、たばこへの感受性が強くて習慣になってしまいます。また、アルコールに強い魅力を感じる人が、弱さからたちまちのうちにアルコール依存症になってしまうのです。短気や議論好き、強欲などもその例です。

どのケースも(ほかの例も同じですが)、単なる感受

性を特定の行動にまで高じさせてしまう感情やそのほかの性格的特徴というもの、遺伝的性質とある程度関連するのではないかと考えられます。しかし、この関連性は恐らく非常に複雑なものでしょう。また、遺伝だと考えているものは、もしかしたら、個人が成長期に特定の影響力に遭遇して獲得した強い傾向にすぎないのかもしれない。しかし、この世でわたしたちに与えられた自由の様々な形態である感受性やわたしたちの持つ人間的弱さがどうあれ（わたしたちはこの世では「肉においては自由」であるにすぎない〔2ネーファイ2：27〕）、わたしたちは自分のもてあそぶ思いや選ぶ行動について、選択の自由を行使したことへの責任は取らなければならないのです。わたしはこの対比について、数年前、ブリガム・ヤング大学で次のように話しました。

「わたしたちのほとんどは生まれつき、『肉体に一つのとげ』を持っています。（それは生まれてからできたものもあります。）また、人よりも目立つものもあれば、人と比べて深刻なものもあります。そして、わたしたちは皆、その一つ一つの障害に対して感受性を持っているようです。しかし、その感受性がいかなるものであれ、わたしたちには自分の思いと行いをコントロールする意志と力があります。これはそうでなければなりません。神はわたしたちに対して、思いと行いに責任を持つように言ってこられました。ということは、わたしたちの思いと行いは、与えられている選択の自由によりコントロールできるはずのものであるということです。一度責任能力のある年齢に達したならば、『生まれつきそうなんだから』という主張をもって神の戒めに合致しない思いや行いを正当化することはできません。わたしたちは死すべき肉体から来る弱さが永遠の目標の達成を阻むことのないように、生活の仕方を学んでいかなければなりません。

神はわたしたちの苦難を聖別してわたしたちの益としてくださると約束されました（2ネーファイ2：2参照）。親から受け継いだ〔もしくは生まれた後に形成された〕弱さを克服するための努力が、永遠にわたってわたしたちの力となる霊的な強さを築き上げてくれるのです。したがって、パウロが『肉体〔の〕一つのとげ』を



ILLUSTRATED BY DEL PARSON

現世でわたしたちに影響を及ぼす肉体上の様々なとげについて考えてみた場合、わたしたちにどれだけの自由が与えられているかは不明な部分が多くあります。しかし、これだけは分かっています。すなわち、わたしたちには皆選択の自由があり、それを思いと行いにおいてどう使うかに対して、わたしたちは自分で責任を取らなければならないということです。これは基本的なことです。

取ってくださるように3度祈ったとき、主はこう答えられました。『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。』パウロは従順な態度で次のように結論づけています。

『それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。』（2コリント12：9-10）

わたしたちの感受性や傾向〔感情〕がどうあれ、神の戒めにより禁じられていることを行ったり考えたりすることにわたしたちの方で選択の自由を行使しないかぎり、感受性や傾向がわたしたちの永遠の行く末を決めること

はできないのです。例えば、アルコール依存症に対する感受性は、その人から中毒症状を起こさずにアルコールを摂取するという自由を損なうものですが、選択の自由を行使することによってアルコールの摂取をやめ、その結果アルコールによる肉体的な衰弱や中毒症状による霊的な退廃から逃れることができるのです。

……『人間には特定の行動に駆り立てる強い力があって、これは人間の選択の力を超えるものである。したがって、人間は自分の行動に責任を持つことはできない』という主張に気をつけてください。この主張は、イエス・キリストの福音の最も基本的な教えに対抗するものです。

サタンは、この世でわたしたちが責任を持つべきことは何もないと教え込もうとしています。これこそが天上の戦いでサタンが勝ち取ろうとしたものなのです。『自分は生まれつきこうだから』という理由で選択の自由の行使に責任を取らない人は、天上の戦いの結果を無視しようとしています。わたしたちには責任があります。もし反対の主張をするなら、その努力は悪魔の宣伝活動に荷担していることになるでしょう。

個人が責任を取るとは人生の法則です。これは人間の法律にも神の律法にも適用されます。文明社会の中では、自分の衝動をコントロールすることが義務づけられます。同じように神はその子供たちに対して、戒めを守って永遠の行く末を確かなものとするには衝動を抑えなければならないと教えられました。法律はその人が短気だからといって、自分を苦しめる相手に、衝動のままに発砲することを許してはくれませんし、貪欲だからといって、衝動から盗みを働くことも許しません。あるいは、幼児に対して異常な性欲を持っているからといって、衝動から実際にその欲望を満足させることを許してはくれません。……

現世でわたしたちに影響を及ぼす肉体上の様々なとげについて考えてみた場合、わたしたちにどれだけの自由が与えられているかは不明な部分が多くあります。しかし、これだけは分かっています。すなわち、わたしたちには皆選択の自由があり、それを思いと行いにおいてどう使うかに対して、わたしたちは自分で責任を取らな

なければならないということです。これは基本的なことです。』⁷

科学的洞察

わたしたちの教義的なアプローチとは対照的に、多くの人々はこの同性愛の問題に単に現代科学の立場からアプローチしようとしています。わたしは科学者としての資格を有しませんが、『自らをホモセクシュアルやレズビアンであると自認する人々は生まれつきそうであることが最近の科学上の発見で分かった』とする人々の主張に対して、科学文献による知識と資格ある科学者や医師の助言に基づいてその誤りを立証しようと思います。

わたしたちは人体に関する科学的な発見が加速度的になされている時代に生を受けています。わたしたちは、自分の身体的特徴の多くが親から受け継いだものとして説明できることを知っています。同時に、わたしたちの行動が親や兄弟関係（特に成長期において）、また育った地域の文化などの心理的な要素に大きく影響されることも分かっています。ある特定の行動が『生得のものであるか否か』との議論は1世紀もの間続けられてきました。この議論を、『同性に対する特別な感情や行動』というテーマにも適用しようとするのは、この非常に複雑なテーマに対する科学的知識がまだ幼監期にあることを物語る一例にすぎないのです。

科学者の中には、人間の行動が遺伝的な影響を受けることを否定している人々がいます。⁸ 一方、『性志向への遺伝的な影響については十分な証拠がある』として、その証拠や理論を示そうとする科学者もいます。⁹

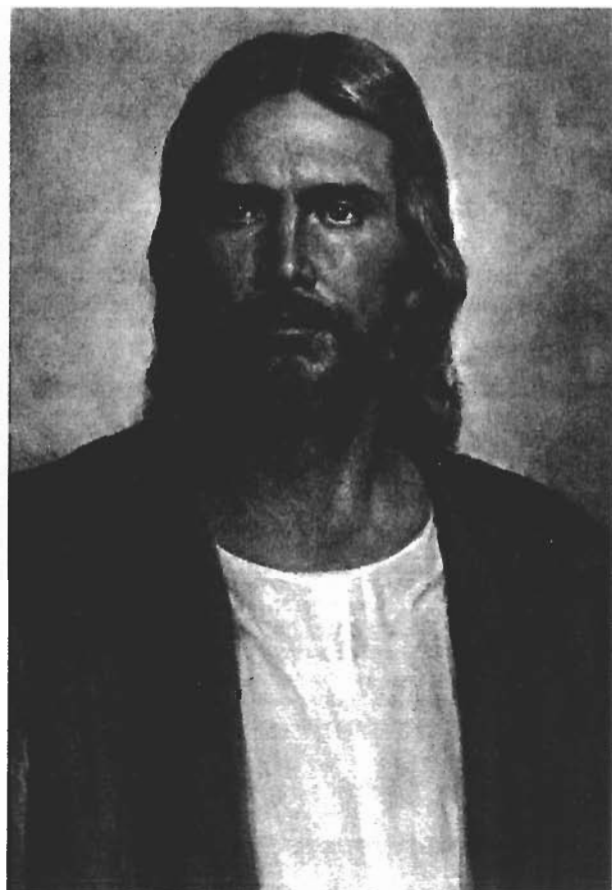
もちろんわたしたちも、ある種の癌や糖尿病のような特定の疾病に対しては、遺伝を裏付けるものがあると知っています。また、人間の行動様式に関連する障害、例えば攻撃性やアルコール依存症、肥満などの傾向の中にも遺伝的性質を認めるとの理論や証拠も出されています。性志向に遺伝的性質が役割を果たすという仮説を立てることは簡単です。しかし、重要なこととして心に留めておかなければならないのは、このアプローチに対して認められている二つの主張です。すなわち、「基本的

な遺伝性と必然的な遺伝性を混同してはならない……また、恐らくほとんどのメカニズムは、生得的な性質と環境による形成との相互作用であろう¹⁰ということです。

性志向が生物学的に決定されるかどうかについては、まったくの否定から完全な受容まで科学者の意見は様々ですが、大まかな点で一致しているのは、現段階で得られる証拠では不十分であり、確固とした結論に至るにはほかの多くの科学研究を待たなければならないということです。

男性の一卵性双生児で一方が「ゲイ」を自認する56組を調査した結果、その52パーセントの組が他方もゲイであることがわかりました。¹¹女性の一卵性双生児の場合も、双方が同性愛者である比率はほぼ同じです（71組中34組で48パーセント）。¹²これらの調査は、自分をホモセクシュアルまたはレズビアンと分類する基となる遺伝的な影響力が何かしら存在することを示すものかもしれませんが。しかし、たとえそうであったとしても、その影響力が決定要因となっていないことは明らかです。ある著名な科学者はこう述べています。「まったく同一の遺伝子を持ち、同じ両親に育てられたにもかかわらず、一卵性双生児の一方が同性愛者、他方が異性愛者になる確率は50パーセント以上ある。」¹³もう一つ注目しなければならないのは、これらの研究（ほかの研究も後述）の結果は自分から名乗り出た人々だけを対象にしているということです。「起源に関する議論の一致は言うまでもなく、臨床医学者や行動科学者の間に同性愛についての普遍的に認められた定義がいまだに存在しない」¹⁴という状況の下での科学的結論としては、いささか論拠が脆弱ではないでしょうか。

新たな知識の分野で最も歓迎されるのは、新たな資料に基づいた証拠です。1993年7月、ディーン・ヘイマー博士が世界の注目を集めました。「染色体領域Xq28上の遺伝子マーカー〔特定可能なDNAの帯〕の遺伝的特徴と18歳以上の男性同性愛者とその親族の性志向との間に統計上重大な関連性」を発見したと発表したのです。言葉を換えて言えば、「Xq28には男性を同性愛に向かわせる遺伝子が含まれているように思われる」¹⁵ということです。ヘイマー博士が自説に対して最も明確に述べてい



THE LORD JESUS CHRIST, BY DEL PARSON

福音の第一の原則は主イエス・キリストを信じる信仰ですが、イエス・キリストはわたしたちに光と力を与え、わたしたちがこの世での障害を克服し、神から授かった選択の自由を用いて永遠の行く末に導く行動を選択できるようにしてくださいました。

る部分を後に出された著書から引用してみましょう。

「一般人に対するXq28の重要性については、経験による推測を適用せざるを得ない。高い方の推測で言えば、この染色体領域が影響を与える可能性は、最大で男性同性愛者の67パーセントである。これは、厳密に選び出した男性同性愛者ならびにその兄弟がこの染色体領域を有する比率である。低い方の推測の場合、同性愛の多くが環境的な要素によって、もしくは相互に関連する数多くの遺伝子によって生じるとすると、Xq28が男性の性志向を決定するケースはわずか数パーセントにすぎない。そこで、わたしたちの関連性を示すデータと双生児とその家族についての入手可能な研究データから平均を取ってみると、Xq28が男性同性愛者に何がしかの影響を及ぼしている比率は5ないし30パーセントとなる。推測におけるこの大きな比率の幅は、さらに多くの研究がなされる必要があることを物語っている。」¹⁶

「同性愛者」を自認する人々の「5ないし30%」という数字は、科学が「同性愛」は遺伝的性質に「起因する」ことを証明したとの主張を正当化するにはいかにも低い数字です。ある著名な科学者は二つの不確実な要素を挙げています。

「同性愛の根本となる生得の生物学的傾向が存在するとしてこれまで取りざたされてきた証拠には、すべて不備がある。……同性愛が遺伝によるものであることを示そうとする遺伝研究を確かめてみると、遺伝的に伝わるものが何であるかも、またそれが性志向にどう影響するのかも明らかにしていない。」¹⁷

コロンビア大学精神医学部のバイン博士とパーソンズ博士は、人間の性志向の生物学的理論への優れた再評価の中で、以下の重要な警告と提案を提供してくれています。

「重要なのは、臨床医学者や行動科学者が性志向の複雑さを理解し始め、社会心理学もしくは生物学からの単純な説明を求めようとする主張に対して抵抗を示しているということである。

性志向の原点を探る理論のほとんどに目立って欠けているのは、自己のアイデンティティーを形成する際の個人としての積極的な役割である。……我々が提唱するのは、遺伝子やホルモンそれ自体が性志向を特定することはなく、ただ特定のパーソナリティーの傾向を強化するという相互作用モデルである。その結果個人と個人を取り巻く環境とが相互に作用して、性志向やそのほかのパーソナリティーの特徴が形成されていく。」¹⁸

この見方は科学者からの数多くの提言の一つにすぎませんが、特に説得力のあるものです。わたしたちがこの世での状態として真実の原則であると考えている、個人の選択という大切な要素を考慮に入れているからです。

教会役員ならびに教会員の責任

1991年11月14日の純潔の律法に関する通達の中で、大管長会は次のように宣言しています。「正しい性関係は、結婚というきずなの下で夫と妻が適切に表現するとき初めて成立します。これ以外のいかなる性的な交わりも

すべて罪であり、それには独身者による私通、既婚者による姦通、同性愛による行為も含まれます。」

教会役員は以上の指示にのっとり、この律法に背いた人々に悔い改めを呼びかけ、預言者サムエルが邪悪なニーファイ人に教えた原則を思い起こさせる必要があります。「あなたがたは手に入れることのできないものを、生涯をかけて求めてきたのである。あなたがたは、罪悪を行いながら幸福を求めてきた。それはわたしたちの大きいなる頭の内にある、あの義の本質に反することである。」(ヒラマン13:38)

人は重大な罪を犯し続けながら、教会員としてとどまることはできません。また罪を奨励する人々に対しても宗紀上の処分が科せられます。もちろん不正な思いや感情に対する宗紀上の処分はありませんが(改善への励ましはある)、行動には必ず結果が伴います。だれも「追い出す」べきではないと教えた同じ説教の中で、救い主は弟子たちに「だれであってもふさわしくないままでわたしの肉と血にあずかることを、承知のうえで許してはならない……だから、ある人が……ふさわしくないと分かったならば、あなたがたはその人に禁じなさい」(3ニーファイ18:28-30)とおっしゃっています。また救い主はこうも命じておられます。「しかし、悔い改めなければ、その人がわたしの民を滅ぼすことのないように、あなたがたはその人をわたしの民の中に数えてはならない。」(同31節。モーサヤ26:36;アルマ5:56-61も参照)すなわち、律法に背いた人々が悔い改めの呼びかけにこたえようとしないならば、教会員の群れの羊飼いは神から託された責務を全うするために宗紀上の措置を講じなければなりません。

同時にわたしたちは、罪深い行いと不適切な思いまたは危険性をはらんだ感受性との間の違いを常に明確にしておかなければなりません。わたしたちは、誘惑に抵抗しようとして苦しんでいる人に愛をもって手を差し伸べなければなりません。大管長会は1991年11月14日の通達の中でその模範を示しました。大管長会は「独身者による私通、既婚者による姦通、同性愛による行為」が罪であることを確認したうえで、こう付け加えています。

「このような問題について援助を望む個人や家族は、



ILLUSTRATED BY DEL PARSON

この世の人生の目的であり末日聖徒イエス・キリスト教会の目的を成すのは、神の息子、娘をその行く末のために備えさせること、すなわち天の御父と似た者となるように備えをさせることです。

監督や支部長、ステーク会長、地方部長に助言を求める必要があります。教会の指導者や会員の皆さんは、こうした問題で苦しむ人々に、愛と理解をもって手を差し伸べていただきたいと思います。正しい道に立ち返るよにどの招きを受け入れ、救い主の贖罪と癒しの力（イザヤ53：4-5；モーサヤ4：2-3参照）を身に受ける時、多くの人がキリストの示されたような愛と靈感に満ちた助言にこたえてくれるでしょう。」

同様に、同じテーマの大会説教の中で、ゴードン・B・ヒンクレイ大管長はこう述べています。「以上の事柄を申し上げたうえで、特に知っていただきたいのは、わたしたちは罪の苦い結果について考えるとき、罪のあるなしを問わずその犠牲者に対してキリストと同じ同情心を感じるということなのです。罪はとがめても罪人を愛した主の模範に従ってください。苦しんでいる人には、いたわりと慰めをもって手を差し伸べ、必要を満し、問題を解決できるように援助しなければなりません。」¹⁹

こうした招きや言明にもかかわらず、教会ならびに教会員は今もなおこうした問題に対する立場について誤解

を受けています。昨年秋にテレビリポーターとのインタビューで、ある教会役員がこういう質問を受けました。「教会ではホモセクシュアルの人々に対して嫌悪感を抱く雰囲気をつくすためにどのようなことがなされていますか。」わたしは、9年前にも同じテーマのテレビインタビューで、幾つかの報道に対する意見を求められました。「同性愛者は落ちこぼれとでも言うべき人間である」と、教会が教えたり暗示したりしているのです。そして、「彼らは自己嫌悪に陥っており、そうした状態は教会がもたらしたものである」とも報道されていました。

もっと重大なことは、そうした質問が忠実な教会員の方々からも寄せられているということです。最近届いた一通の手紙にそのことが如実に表れています。

「もう一つ懸念していることは、わたしたちの息子や娘たちが常軌を逸したわいせつな行動を取る者たちであると決めつけられていることです。中にはそのような人々もいるかもしれませんが、でもほとんどは違います。この若い男女は生き残りたいだけなのです。霊的な生活

T 106 東京都港区南麻布 5-10-30
TEL. 03-3440-2602(直)

末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター
〒231 神奈川県川崎市高津区瀬の口 131
TEL. 044-811-0417

カセットテープ
『若い女性キリスト教』
25冊を収録 録音テープに転載されている全
50045 150分
52533 120分

をし、家族と教会から離れずに生活したいと思っているのです。特に彼らを傷つけるのは、あのような否定的な言葉が説教壇から語られるときです。あのような説教は抑うつ状態に拍車をかけ、途方もない罪悪感と恥辱と自己嫌悪をもたらすのではないのでしょうか。彼らはこの世の生涯の間ずっとそれらに耐えていかなければならないのです。苦難の中にある彼らに対して、キリストの純粋な愛がほとんど示されないことがしばしばあります。このような大きな誤解を受けている天父の子供たちの立場を改善するために、力を尽くしていただけたら幸いです。もし中央幹部の何人かがこの問題についてもっと繊細な心を示してくださるなら、自殺や家族の分裂を回避することができると思います。教会員が彼らを『邪悪な民』と決めつけるために、彼らは同性愛者だけの生活様式に慰めを見いださざるを得ません。この現実には、やるせない気持ちでいる人がたくさんいるのです。』²⁰

こうした手紙を見ますと、問題を抱えて苦しんでいる兄弟姉妹との意思の疎通を改善しなければならないのは確かです。あらゆるタイプの問題についてそれが言えます。キリストの教会の会員一人一人には、愛と理解を示し、助けの手を差し伸べなければならないという、明確な教義上の責任があります。罪を犯した人々も、ふさわしくない思いを退けようと苦しんでいる人々も、追放されるべき人々ではなく、愛と助けを受けるべき人々なのです（3 ニーフай 18:22-23, 30, 32参照）。しかし同時に、教会の指導者と会員は、たとえ一部の人々に不快感を生じさせようとも、正しい原則と義にかなった行動を教えるという責任を回避してはなりません。（あらゆる事柄に関してです。）

末日聖徒イエス・キリスト教会の中でホモセクシュアルやレズビアンへの傾向や思いを持つ人々のいる場所はないのかと、教会指導者は時々聞かれます。もちろんあります。抱えている問題の程度や、行動を慎み思いをコントロールするためのパターンなど、それぞれ個人差があります。しかし、教会が提供する希望のメッセージとフェロシップの手は、努力するすべての人に同等に与えられます。

「これらの人々は落ちこぼれとでも言うべき人々であ

る」と教会が教えている、などとほめかしたテレビリポーターに対して、わたしは重要な違いを次のように説明しました。

「そうした傾向に対して〔歯止めをかけようと〕努力している人は、自分を落ちこぼれであると考えする必要はありません。さて、これとまったく異なるのが結婚関係以外で行われる性関係です。そうした行動にかかわった人は罪悪感を覚えてしかるべきです。そうした行為をしないようにとの戒めを与えられた神から隔絶されると感じて当然です。わたしは、彼らが教会から隔絶された気持ちになることに対して別に驚きは覚えません。驚くべきことは、神の戒めを教会が反故にすることができると彼らが考えることです。……^{かんいん}姦淫の罪を犯して連れて来られた女がいました。（これはわたしたちにとっていい先例となります。）……〔救い主は〕慈悲深く愛に満ちておられましたが、こう言われました。『お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。』主は罪人を愛し、罪を非難されたのです。わたしは教会も同じだと思います。もちろん不完全ではありますが、罪を犯した人々を愛し、罪を非難することをわたしたちは教会員に教えています。』²¹

同性愛の問題を抱えた人々の悩みは独特のものではありません。誘惑は性的なものに限らずいろいろあります。そして、罪を拒む義務はこれらの人々すべてに当てはまるのです。

罪に陥った人々や罪を拒もうとして格闘している人々に教会が提供できる最も大切な助けは、真実の教義を教え、回復された神聖な儀式を執行することにより、教会の使命を果たすことです。福音はすべての人に同じ基準の下に適用されます。その中心を成す真理は救い主の贖罪と復活であり、それを通してわたしたちは不死不滅と永遠の命を享受できるようになりました。この永遠の行く末を全うするために、この世においてまた次の世において、神のすべての子供たちのために定められた神聖な目標が、永遠の結婚です。しかしながら、この神聖な目標は主の方法で達成しなければなりません。例えば、ゴードン・B・ヒンクレー大管長は「結婚を、同性愛の傾向や習慣を治癒するための一手段と見なしてはいけま

せん」²²と述べました。

苦しんでいる人々は、キリストと教会を通して助けを得ることができます。こうした助けは断食と祈りを通して、福音の真理を通して、教会への出席や奉仕を通して、霊感を受けた指導者からの勧告を通して得られます。問題によっては、必要に応じて専門的な援助が得られます。もう一つの重要な力の源は、愛に満ちた兄弟姉妹の励まし力の力です。だれもが理解しなければならないのは、同性愛の問題で苦しんでいる人々（やその家族）は愛と励ましを特に必要としている人々であり、しかもそのような人々を愛し励ますことは、聖約によって、進んで「互いに重荷を負い合」い（モーサヤ18：8）、「キリストの律法を全うする」（ガラテヤ6：2）と言明した教会員の明白な責任であるということです。

福音の第一原則は主イエス・キリストを信じる信仰ですが、イエス・キリストはわたしたちに光と力を与え、わたしたちがこの世での障害を克服し、神から授かった選択の自由を用いて永遠の行く末に導く行動を選択できるようにしていただきました。わたしたちには次のような約束が与えられています。「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」（1コリント10：13）

結 論

科学的な証明と宗教上の教義の見方の違いは、車の動きを観察し、部品の一つ一つを分解して分析していく方法と、メーカーが作ったマニュアルを読む方法との違いにたとえられます。観察と分析からも多くのことが学べるでしょう。しかし、その方法からはマシンの機能や可能性について部分的な知識が得られるにすぎません。マシンの操作と可能性についての完全な知識は、メーカーが書いたマニュアルを研究することによって明らかになります。わたしたちの霊と体についてのマニュアルは聖文です。わたしたちを創造された神によって書かれ、神の預言者が解釈を加えているマニュアルです。聖文は人

生の目的についての、また幸福な生活をし永遠の行く末に到達するために培わなければならない態度や思いについての最良の知識の源なのです。

この世の苦難に悩むすべての人々は、ニーファイの詩の嘆きに自己を見いだします。「『おお、わたしは何と惨めな人間なのだろう』と叫ぶ。まことに、わたしの心はわたしの肉のために苦悩し、わたしの霊はわたしの罪悪のために嘆く。

わたしは非常にたやすくまとわりつく誘惑と罪に取り囲まれている。」（2ニーファイ4：17-18）

罪に抵抗する意志と強さを身に付けるには、神を信頼し、助けを求めて祈らなければなりません。ニーファイは苦難の間自分を守り導いてくださった神に感謝しています（20節参照）。そして、「わたしの肉のことで、どうして罪に負けてよいだろうか」（27節）と問うたニーファイは、自分を贖い、「わたしが罪の兆しに震えおののくようにしてください」（31節）と祈るのです。

そしてニーファイは、本稿で述べてきた問題を抱え、その解決を求める人々に直接当てはまる言葉で締めくくっています。

「おお、主よ、わたしはあなたを頼ってまいりました。これからもとこしえに、あなたを頼ってまいります。わたしは肉の腕に頼る者はのろわれることを知っているの、肉の腕には頼りません。まことに、人に頼る者、すなわち肉を自分の腕とする者はのろわれます。

まことに、わたしは、神は求める者には惜しみなく与えられることを知っています。」（34-35節）

わたしたちに完全になるようにと命じられた御方は、血を流すことによりわたしたちが神となる目的を達成する機会を与えていただきました。わたしたちの永遠の命を得る能力に対する主の信頼は、次の驚くべき招きの言葉に表れています。「あなたがたはどのような人物であるべきか。まことに、あなたがたに言う。わたしのようであればならない。」（3ニーファイ27：27）□

（本稿に関する注釈は、p.25を参照してください。）